下流の堤防道路：車の通行が多く、歩道もないため川沿いを安心して歩けない。川に近づきにくい。

堤防下をサイクリング

ほっとできる砂利の散歩道

木陰があると一息つける

＊庄内川の河川空間利用調査では散策、スポーツ利用がそれぞれ50％程度。水遊びは3％にすぎない。
＊散歩利用が多いということはまずは安心して歩ける道、要所に一息つける木陰などがあることが大事だということ

提案2 川沿いのポイント結ぶ「体験学習回遊ルート」を策定する

川をながめ、景色をながめ、人をながめ、歴史、文化を伝え、地域の交流をすすめるための体験回遊ルートを考える
地域の歴史と川はきりはなせない。つなげてたどることで歴史、文化の交流がうまれる。

下津尾の渡し跡：説明板があるとよい

【方針】

●川沿いの歴史文化、環境学習のポイントをピックアップし、それをつなぐ回遊ルート（トレイル：散歩道）を設定する。
●「東海自然歩道」のように市民に愛される名前を市民公募でつける
●内容的には、総合学習に役立つようなものを選ぶ。
川沿いには、化石、漁業、酒屋、染物、産業遺産がちりばめられている。王子製紙取水場も、川が産業に貢献していることを伝えたい。愛知用水の説明も入れたい。水位メーターは、災害や防災の学習になる。支流が入ると臭い、汚れ。子どもといっしょに川の問題を見ると、大人も考えさせられる。

【具体的な事業案】

●ポイント選定、ルート設定のための、参加型の調査のプロジェクトを、学校の先生なども参加して組み立て、子どもたちにも資源発見やルートづくりに参加してもらう（事例／ロンドンのテムズ・トレイル）。
●参加による案内地図、説明ブック等の作成。
●ホームページ実行委員会を設け情報収集整理し、マップという形にする。
●参加、協働による案内版の作成と設置、維持管理。
●案内ボランティアの養成が必要。
●活用モデルプログラムの実施。
＊川ナビ事業、土岐川観察館などの連携をつくっていく。

【活用の展開イメージ】

●学習トレイル（回遊ルート、散歩道）の、学校の授業への実験的な活用プログラムを積み上げ他の学校にも活用してもらう。
●流域の学校がお互いの学校を訪ねるようなプログラムも考えられる。
＊参考／2001年度に、庄内川河川事務所の実験的な事業として、上中下流の3つの小学校での総合学習の取り組みと、その成果をもとにした流域交流学習プログラムが提案されています。そのようなプロジェクトの継続には、地域や市民団体が主体となってプロジェクトを進めるための支援システムが必要となります（行政や教師が主体だと、人が変わると立ち消えになるので）。
「支援システム」として考えられるのは、「拠点づくり」（上流の土岐川観察館のような施設が、上中下流にありネットワークするとか）を中心に、「プログラム開発」、「支援スタッフ」（川ナビ、川の学芸員）が行われる、「資金援助」などが考えられます。
●流域を歩くイベントも行いたい。

水辺の楽校（土岐小学校）

提案3 「遊べる河原」「降りられる場所」を確保し、市民との協働で「川辺の小路」を管理する

【機能】

自然体験のできる生態系の豊かな河原、自由な利用ができるアウトドア遊びの河原、渓谷でのバーベキューなど、河原の状態を活かした体験や遊びができる河原を保全活用する。

河原に降りられる小道
グッドデザイン!

【整備課題】

●特に下流域では、ゴルフ場などの占有利用面積が多いこと、芦が密生しているなどで、市民が自由に入れる自然な河原がほとんどない。
●河原でのバーベキューは、河原を汚したりゴミの散乱の要因ともなるのでルールや管理のあり方について検討する必要がある。

【整備の方針提案】

●下流域では、河川敷の占有利用の面積、用途をコントロールし、自然な河原を確保する。
●「川辺に降りられる場所」を、橋のたもと、「川辺の小路」の入り口などに確保する。
●できるかぎり木を残し、できれば新しく木を育てる。
＊市民グループと行政と協働または、アドプト活動として「川辺の小路」を市民グループなどが整備管理する。
＊「川辺の小路」の策定にあたっては、民地内（ゴルフ場や農地の川べりなど）でも所有者の協力を得て設置できるような協力をあおぐ。